

そして何より、「信」によって二重構造の循環を促し、「現実／虚構」のあり方を人為的に揺るがすことは可能であり、とりわけ、「虚構」であるという了解があったにもかかわらず、意識的なダイナミズムの利用によって積極的に「メタ概念図式」を変容させ得、やがて「現実」へと影響を及ぼすようになり、それ自身「現実」の一部と化していくようなテキスト、そのような「概念図式」こそが、「神話」であると発表者は定義づける。

Philosophia perennis という概念の

歴史的変遷をめぐる考察

リアナ・トルファシユ

「永遠の哲学」とは、二十世紀の初め頃から、様々な思想家や哲学的・宗教的学派によって広く用いられるようになった哲学的な概念である。その明確な意味については一致した見解が存在しないが、一般に「ある主題が哲学の歴史の中を絶えず流れ続けており、また、ある不朽にして永続的な真理を、歴史上のいかなる時代における哲学書の中にも見出すことが出来る」という内容を指すものとして理解されている。現在「永遠の哲学」を代表すると自ら主張している学派の内でも最も有力なのは、ルネ・ゲノン、アーナンド・クマールスワミ、フリッツ・ヨフ・シュオンなどを中心として前世紀の三十年代頃に登場し

た、一般に「永遠の哲学派」と呼ばれているものである。彼らにとつて「永遠の哲学」とは、始まりをもたず、また様々に異なった知恵の表現において、それ自体として変わることはない形而上学的な真理を意味している。そして、こうした真理を歴史上のあらゆる時代における文書および口承伝統の中に見出すことが出来ると彼らは主張する。

既に二十世紀の中頃から、ハインリヒ・ツィマー、ミルチャ・エリアード、ステラ・クラムリツシュ、アンリ・コルバン、ジルベール・デュラン、アントワーヌ・フェーヴルなどといった学者たちが、何らかの形でその影響を受けていた。また過去数十年の間に、とりわけ米国や英国で比較宗教学や宗教多元主義について研究している学者達の永遠の哲学派に対する感心が次第に大きくなってきた。永遠の哲学派の思想は宗教的なものであり、またその影響は宗教学の領域にまで広がってきている為、宗教学は同学派の主張をより良く知る必要があるように思われる。一方、「永遠の哲学」という概念自体が、それ本来の用法から現代における同学派の用法に至るまでに一体どのような歴史的変化の過程を辿って来たのかを明らかにする必要があるだろう。

本発表の目的は以下の通りである。一、現代における永遠の哲学派の思想に関し、その根本的な主張を要約すること。二、「永遠の哲学」という概念や、それに相当する他の表現の歴史を、過去へと遡って明らかにすること。三、以上の二点に基づいて、「永遠の哲学」という概念本来の用法と、現代におけるそれとを隔てる約四世紀の間に、同概念の宗教的な意味内容が

第2部会

どのように変化して来たのかを明確にすること。

以上の点に関する分析から得た結論をまとめて次のように言えよう。

一、「永遠の哲学」という用語の初出は、ルネサンス期の哲学者にして神学者アゴスティノ・ステウコの『永遠の哲学について』という書物の題名においてであったようだ。ステウコのこの概念は三つの主な特徴を有している。①永遠の哲学とはそもそも啓示された神的な事柄に関する知恵であり、時代や文化を通じて本質的にただ一つである。②その唯一性は原理の唯一性によって根拠付けられている。③原初の啓示以降この知恵は次第に忘れ去られてゆくのだが、にもかかわらず、それはいつでも、また誰によっても、神の観照を通じて再度明らかにされ、また認識され得る。

二、自らの哲学を特徴付けるために「永遠の哲学」の語を用いた二十世紀の様々な思想家や学派の中では、ステウコが理解したこの概念の要点にもっとも近いものは、永遠の哲学派である。したがって、この学派はステウコの「永遠の哲学」という概念の正当な後継者であると言える。数世紀にわたる凋落にもかかわらず、その「父」がステウコであると見なされる「永遠の哲学」という概念は、現代の永遠の哲学派において、新たな衣装を身に纏い甦ったとも言い得るのである。